

“Heart to Heart”

心から心へ わかちあう あたたかさ

第10巻 第1号 (No.29)

発行日 平成27年7月1日

目次:

| | |
|-------------------|-----|
| 学びたい気持ちに寄り添う | 1 |
| 療育プログラムのように | 2/3 |
| コラム:自閉症児の教育と研究(4) | 4 |
| ご案内 | 4 |

学びたい気持ちに寄り添う

武蔵野東教育センター所長 計野浩一郎

武蔵野東教育センターが、教育研究所から名称変更して10年が過ぎました。この間、会報のタイトルにもなっています「Heart to Heart～心から心へ わかちあう あたたかさ～」に込められた「子どもたちや保護者の方々の気持ちを尊重し、人との関わり心地よさや支え合うことの大切さを共に感じながら、活動を進めていく」という言葉を胸に、療育プログラムを中心として所員一同一丸となって駆け抜けた年月でした。

ところで、子どもたちと日々接していると、どの子も字を書きたい、本が読めるようになりたい、たくさん話ができるようになりたいなどと強く思っているのを感じます。それは、センターのスタッフの日常の言葉「こんな工夫をしたら、ノリノリで文字を書くようになった」「〇〇君がほめられているのを見て、もっとがんばりだした」などからも伺い知ることができ、決して勉強したくないのではないということがよくわかります。

しかし、一般的に「文字が読めない、話ができないのは障害のある〇〇君の個性で、無理をさせることはかわいそう」という説明がなされたり、「診断があるから仕方がない。診断がなければ本人のやる気や保護者の子育ての問題」とされたりすることが少なくありません。本来なら、学校教育法にもあるように、どの子どもにも合う指導方法を考え、子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援がなされる必要がある

にも関わらず、「集団の中では一人だけ特別扱いはできません」や「個別に取りだして指導することは時間的にできません」と言われてしまうこともあると聞きます。

集団の中で、その子もわかるし、みんなもわかるという授業づくりをしている学校もありますが、まだまだ一部の学校・一部の地域にとどまっているのが現状です。2014年に批准した国連の障害者の権利条約には、基礎的環境整備と個人に必要な合理的配慮が提供されるべきであると記されていますし、WHOのICFでは、大事なことは環境因子であると書かれています。特別扱いでも障害があるからでもない環境づくり、授業づくりに対して、教育センターとしても寄り添えるように関係機関との連携を深めていきたいと考えています。

これからも、ものの見方や考え方、理解の仕方の違う子どもたちの学びたい気持ちに忍耐強く寄り添っていきます。そのためにも多様性を踏まえた工夫を凝らした教材・教具等を準備して、個々の課題に対して習得できるまで徹底した指導を展開していきます。

最後になりますが、間もなく子どもたちが楽しみにしている夏休みをむかえます。ご家庭で日ごろできない学び(学習、お手伝い、旅行)に計画的に挑戦することもよいと思います。夏休み明けに、たくさん思い出を語ってくれることを楽しみにしています。





療育プログラムのようす 【各教室・言語・ラーニングプログラムの様子】

幼児絵画造形教室 構成遊びをしています。○△□の形を組み合わせてできるものは…？実際にパーツを手元で動かしてイメージしながら「ロケットができた！」「僕はきりんになったよ」と、いろいろな発見がありました。この構成遊びでイメージを膨らませ、見立てて遊んだ後に、空き箱や牛乳パック等の廃品素材を使って楽器をつくったり、好きな乗り物をつくったりもしました。子どもたちの豊かな発想が形になり素敵な作品ができました。(吉野)



ロケットができた！

言語プログラム 注意がそれて、話を聞き逃してしまいがちなお子さんに数種類のカードを色や形ごとに分ける課題を行っています。仲間分けをした後に、「これは何色(どんな形)？」という質問に答えてもらいます。聞かれているのは「色」なのか「形」なのか、正しく聞き取る力が必要です。練習を重ねると少しずつ指示に注意を向けられるようになってきました。(大澤)



色と形

体育教室 小学生は、跳び箱の課題に取り組んでいます。開脚跳びの導入として、踏み切りからタイミングよく両足を開き、跳び箱の上でしゃがむ「カエルの一休み」の練習を繰り返して行っています。この練習は両手のつく位置や腕を支点とした体重移動の要領を覚えるのに効果的で、今からたくさんの「跳べたよ！」を聞くのが楽しみです。(鈴木)



カエルの一休み

SST教室 5・6年生は、みんなで話し合っ、活動内容を決めることに取り組んでいます。毎回、司会を交代して全員が経験できるようにしています。話し合いの中では、それぞれが友だちの意見を聞き取ってプリントにメモするようにしています。今後も、様々なテーマで話し合いをする機会を設けて、継続して練習していきたいと思えます。(大澤)



話し合いの様子

ダンス教室 ヨガには、バランス感覚を養う「立木のポーズ」というものがありますが、ダンス教室でも取り入れています。床をしっかりと踏みしめ、心を落ち着けて行うことで平衡感覚に加えて集中力も身につけることができます。最初はふらついていた子どもたちも、次第に肘や膝を伸ばしてしっかりと立てるようになってきました。たくましい大木、空に伸びていく背の高い木など、実物をイメージしながら皆で楽しく取り組んでいます。(新堂)



わたしは木！

ラーニングプログラム 幼児は、認知力を高めるための学習を行っています。鉛筆を使って波線やジグザグ線をなぞったり、同じ絵どうしを線でつないだりする課題は、運筆力を高め、文字や数字を書くことにつながっていきます。他にも、絵カードや積み木、パズルなど様々な道具を使って学習を進めています。(大澤)



同じ絵どうしを線でつなぐ

幼児体育教室 5月からポックリを行ってきました。開始当初は、動作がぎこちなかった子どもたちも、フープをまたぐ練習やマットの上を歩く練習を繰り返す中で、紐を引き上げながら足を同時にあげるなど上肢下肢の協応運動が上手にできるようになりました。屋上の芝生の上という足元が不安定なところでも一歩一歩確かめながら歩いている姿が印象的でした。(鈴木)



屋上をポックリでお散歩

コンピュータ教室 今年度より、5、6年・中学生クラスに加えて、新しく中学・高校生クラスがスタートしました。パソコンに必要なルールやマナー、タイピングのための姿勢やホームポジションを確認しながら、初級・中級・上級に応じてタイピング技術を習得できるよう取り組んでいます。また、母の日や父の日には、内容を考え「お手伝い券」を作成して、プレゼントしました。(高橋)



特製手袋を使って入力



【スクールプログラムの様子】

幼児 新しい環境にもすっかり慣れ、幼児グループは元気一杯です。年長児は友だちをもっと知って仲良くなるための活動を「仲よし作戦」と呼んで、「椅子取りゲーム」「危機一髪ゲーム」「おにごっこ」などの集団でのゲーム遊びに取り組んでいます。お友だちからの「がんばって！」の声援で苦手なことにも挑戦できた時、仲間の芽が育っているなど嬉しく感じます。(本田)



さあ、とぶかな？

2年生 国語では、物語「スミィ」の学習をしています。作中には、文章だけでは想像しづらいスミィの気持ちの描写や、ブルドーザーやドロップなどに例えられた海の生き物などが多く出てきていますが、冒頭にビデオを観てから授業を行うことで、子ども達が物語のイメージを持って学習を行うことができています。(猪野)



物語:スミィ

1年生 音楽の授業で「鍵盤ハーモニカ」の練習をはじめました。指定された音を探しやすくするため、黒板に提示されてある大きな鍵盤の階名のシールと子どもたちの鍵盤の階名のシールは同じにしてあります。今は、みんなで音を合わせて、音階の練習をしています。楽器にふれ、音楽をさらに楽しんでほしいと思います。(宮下)



♪ど〜れ〜み

3年生 『俳句を楽しもう』という学習を行いました。松尾芭蕉の「奥の細道」を紹介すると、まずは皆地図に興味津々。旅の様子を知り、「どうして歩いて行ったのかな？」と不思議そうな様子。昔は車や電車などがなかったから歩いて旅をしたんだね、という話を聴き、驚きの表情を浮かべていました。その後は俳句のリズムや言葉の面白さを音読しながら楽しむことができました。(諸橋)



菜の花や月は東に日は西に



「ド〜レミソラド〜ラー…」

4年生 鍵盤ハーモニカを使って「とんび」を演奏しています。黒板に貼られた階名譜を見ながら曲を覚えていくことや友だちの音を聞きながらテンポを合わせて演奏するのは意外と難しいものです。子どもたちは耳で音を聴きながら目で階名譜を追い、指で手元の鍵盤を押さえていくという複数のことを見事にこなすことができています。(藤本)



のりで貼って、完成！

5年生 図工では、切り紙を使っていろいろな作品を作っています。折り紙や色画用紙を半分に折り、重ね切りをすることで、紙を開いて魚や船などの形が出来上がることを楽しみに切り進める姿が見られます。繰り返し練習する中で、「はさみを少しずつ進める」「紙を回して向きを変える」「はさみを止めたいところで止める」ことが上手になってきました。(臼井)



「〜してあげた／くれた」

6年生 国語では『動詞にそえて使う言葉』の勉強をしました。パンダのぬいぐるみに帽子をかぶせながら「ぼくがパンダに帽子をかぶせてあげた」、逆にぬいぐるみに帽子をかぶせてもらいながら「パンダがぼくに帽子をかぶせてくれた」と言う練習をすることで、「〜してあげた／くれた」という表現の使い分け

について、具体的に学ぶことができました。(大澤)



宇宙についての学習、文章読解

中学生 国語の時間には『太陽、月、星の動き』という単元で宇宙について学習しました。地球から太陽までの距離、地球以外の惑星、どうして月は満ち欠けをするのかななどについて学習し、生徒たちは皆興味津々の様子でした。一斉指導の後は個別のレベルに応じた読解問題や、語句の意味理解に向けての学習を行い、単元の理解が深まりました。(吉田)

**研究からの示唆と教育のあり方**

東條吉邦 (茨城大学教授、元・国立特殊教育総合研究所分室長)

拙著『発達障害の臨床心理学』(東條・他編、東京大学出版会、2010年)をはじめ、自閉症に関する図書や論文では、支援の技法として、ABA(応用行動分析)やソーシャルスキルトレーニング等が紹介され、特に、ABAの効果は科学的に証明されているという記述をよく見かけます。支援者が不適切と考えている行動の頻度を減らし、望ましいと考えている行動を増やす技法としてABAが有効なことは、確かに実証済みですが、「支援者の価値観の押しつけ」といった批判もあります。前回のコラムでは、赤ちゃん研究からの示唆として、報酬で行動をコントロールすることの問題点を指摘しましたが、それだけではなく、上記のような支援技法の実施には、多大な時間が必要となるため、子どもの発達に必要な仲間との遊びや様々な働き

かけを行う時間と機会が減ることも問題点の一つです。

子どもの健やかな成長には多くの要因が絡み、何が大切かを見極めるのは難しいことですが、本人にとって楽しい活動は、自発性や能動性を高める大きな要因です。「楽しさ」「笑い」「幸福感」といったポジティブな感情を引き出す活動の重要性を示唆する研究も増えており、自閉症児の笑顔に関して、表情筋の筋電図の分析によって実証的に検討している研究者もいます。

近年、脳研究からの示唆にも注目が集まっています。しかし私は、『発達と支援』(日本発達心理学会編、新曜社、2012年)の『脳科学と発達支援』という章の冒頭で、脳研究からの提言を鵜呑みにしないことが大切であり、

「脳科学の最新情報」や「脳科学による最先端の治療法」は、数年後には否定されたり、大幅に修正される場合も多いと書きました。メリットのみ強調し、デメリットの検証を怠りがちなのが研究の世界の大きな問題点です。このところ注目されているユニバーサルデザインに対しても、「子どものためよりも、支援者の安心のため」といった批判もあります。

研究からの提言を即座に教育や支援の技法に取り入れるのではなく、支援者は、長期的な観点から発達を見ること、様々な問題点を探して検証すること、そして、子どもに合わせることなどの幅広い視野をもつことが大切です。



このコラムは4回シリーズでお届けしました。

保護者勉強会のご案内

当センターのスタッフが受講者の保護者の皆様に以下の日程でお話しさせていただきます。

第2回 9月17日(木) 10時～12時

高橋奈都子 「家庭でできる生活スキルの練習」
猪野雄介・吉田竜太郎

「学習上の様々なつまづきへのアプローチ」

第3回 12月3日(木) 10時～12時

鈴木裕磨 「家庭でできるエクササイズ」
大澤徹也 「発達検査の結果の生かし方」

**武蔵野東教育センター**

〒180-0012 武蔵野市緑町2-1-10

電話 0422-53-8585 FAX 0422-53-8595

Email: education-center@musashino-higashi.org

ホームページもご覧ください

<http://www.musashino-higashi.org>**セミナーのご案内**

今年度後半のセミナーを以下の通り実施いたします。ご希望の方はお早めにお申し込みください。

Ⅱ. 平成27年10月8日(木) 10時～12時

「知ろう!子どものからだと心 考えよう!子どもの元気生活」

野井 真吾 (日本体育大学教授)

Ⅲ. 平成28年2月26日(金) 10時～12時

「子どもを育てるといふこと ～成人になった事例を通して～」

寺山 千代子 (星槎大学客員教授)

